

『遠野物語』の物語性とは何か

—「神隠し譚」をてがかりに—

岡部 隆志

一 境界状態を描く

遠野物語が描く世界はほとんど境界の領域の出来事と云っていいものである。空間としては家・里・山と遠野の生活圈から奥深い自然領域までの広い領域であるが、そこで起こる出来事はいわゆる不思議もしくは怪異と評されるものを中心である。神隠し、山人や異人との出会い、家に祭られる神、動物、靈魂等の話がたくさん載せられている。

それらの、日常とは違う出来事や現象が生起する場所とは、この世とこの世ではない異界との境界が立ち現れたときと解せば、遠野では、家の中、道、峠、川、そして山とあらゆる領域で境界が立ち現れるのだと言える。もちろん、子細に見ていけばそれなりの共通した境界らしき特徴はあるのだとしても、遠野物語における境界とは日常のいつどこにでも現れる異世界への扉のようである。

いや扉というのではなく、それは、境界状態というものであろうか。遠野物語には、実に様々な境界状態における出来事や現象が語

られている。時には、それは一編の物語ですらあるが、ただ、遠野物語は、物語とはなっているけれども、収められた一つ一つの話は物語というほどの長さも、物語を構成する約束事のような要素もそろえていくわけではない。その意味では物語というほどのものではない。断片的なエピソードを記したものや、概略的に語るものや、その描き方は多様だが、虚構という約束事を前提に読み手を誘うような方法をとっていない。

しかし、それでもやはり、どこか物語的なのである。一つ一つの話が短くて、事実のような体裁を崩さずに描かれていて、しかも物語的書かれ方ではなくても、物語がそこにあると感じさせるのである。

柳田国男の元に友人の小説家水野葉舟が佐々木喜善を伴って訪れ、柳田が遠野の不思議な話を聞いたのは、明治四十一年十一月四日のことであった。佐々木喜善は、そのときのことを「お化話をして帰って」と日記に書いている。一方、柳田は手帳に「このときのことを」其の話のままかきとめて『遠野物語』をつくる」と記している。柳田

と佐々木喜善との遠野の話に対する認識の違いとして指摘されているところだが(石井正巳「遠野物語の誕生」、このとき、柳田が喜善の話を聞いて「遠野物語」とすぐに名付けたのは、佐々木喜善が語った話の全体に一般的な意味での「物語」があると感じ取ったこととであろう。その「物語」に特別な意味を込めたというよりは、むしろ「お化話」のような怪異譚をただ集めたものにしないうための名付け方であった面が強いと思われる。

が、それでも、柳田が佐々木喜善の話に強く惹かれたのは、やはりそこに「物語」を感じたからだと思いたい。

藤井貞和は物語を「他者を抱え込んで成立する在り方を示す叙述のすべて」と定義している(藤井貞和「物語理論講義」)。このような定義だと当然、遠野物語のそれぞれの短い叙述は、物語そのものということになる。遠野物語での他者とは、山男、山人、神、霊、動物等であり、それらの他者と里の村人とが交錯する出来事の叙述である。

他者と交錯する状態、それは境界状態ということでもある。とすれば、もつと遠野物語に引きつけて、「境界状態に生起する出来事の叙述」と物語を定義することもできよう。遠野物語の物語を語ることは境界状態を語る。こと。そう考えてみる。

二 事実を語る工夫

物語とは、英雄の成長譚のように大きなストーリーを構成するもの、といったとらえ方からすれば、確かに、遠野物語の個々の話に

は大きな物語ではない。何故遠野物語は長いストーリーを語らないのか。その理由は、遠野物語では一つの出来事を構成する時間が、語られた時点の現在を語る視点に置いて、その視点を決して消失させないからである。

ザシキワラシまた女の児なることあり。同じ山口なる旧家にて山口孫左衛門といふ家には、童女の神二人いませりといふことを久しく言ひ伝へたりしが、ある年同じ村の何某といふ男、町より帰るとて留場の橋のほとりにて見馴れざる二人のよき娘に逢へり。物思はしき様子にてこちらへ来る。お前たちはどこから来たと問へば、おら山口孫左衛門が処から来たと答ふ。これからどこへ行くのかと聞けば、その村の何某が家にと答ふ。その何某はやや離れたる村にて、今も立派に暮らせる豪農なり。さては孫左衛門が世も末だなどと思ひしが、それより久しからずして、この家の主従二十幾人、茸の毒にあたりて一日のうちに死に絶え、七歳の女の子一人を残せしが、その女もまた年老いて子なく、近き頃病みて失せたり。(遠野物語一八)

例えばこの話では、いくつもの現在の視点が設定されている。まず、ザシキワラシと出会った男の現在、それから、山口孫左衛門の主従二十幾人が死に絶えて女の子が生き残ったという現在。そして、その女の子が年老いて近き頃死んだということ語っている現在。むろん、この全体を支配しているのは、最後の、「近き頃病みて失せたり」と語る時の現在である。だが、語り方はとても巧みで、最初は

ザシキワラシと男との出会いの現在に視点が設定されているかのようだが、それが、山口孫左衛門の主従二十幾人が死に絶えたという出来事の現在にスライドし、最後に、生き残った女の子も年老いて亡くなったと、これら全部が過去の出来事であることが明かされる。

ポイントは最後の「近き頃」である。この「近き頃」がなければ、語り手は時間を超越した語り手として、この一連の出来事を物語ることができたろう。が、「近き頃」が入ることによって、「近き頃」と語る時点の今に語り手は縛られることになる。つまり、草にあたって死に絶えたことも、ザシキワラシに男が会ったということも、その時点から逆算できる過去のある時点の出来事になる。時間を超越した物語世界での出来事にならなくなるのである。

石井正己は、遠野物語が「事実としての話を作る方法」として、「内にある時間」と「外にある時間」とが叙述のなかにあることを分析している。「内にある時間」とは、出来事を語るときの内在する時間の叙述であり、それは、その話を語っている側の時間とは断絶している（「遠野物語の誕生」）。言わば聴き手を話の中に誘い込む工夫である。一方、遠野物語には最後に「〜といへり」という形で終わる場合が多い。この最後の「といへり」は、遠野の人々もしくは佐々木喜善が、今まで叙述されてきた出来事を「と」で受けて「言っている」という意味であり、遠野の人々にとつてその出来事が現在にまで存続している、ということであらわす。これが「外にある時間」だということである。

この石井の指摘に倣えば、「近き頃病みて失せたり」はそれまでの「内にある時間」に対して「外にある時間」の叙述ということになろう。

つまり「遠野物語」は読み手を話の中に誘う「内にある時間」を巧みに用いて叙述し、最後に「外にある時間」の叙述がそれらを全部包み込む入れ子型構造になっている、ということである。

ただ、以上の説明では、いわゆる物語における物語内の時間と草子地における物語を語る時間との対比というようにもとられてしまう。遠野物語の「外にある時間」の叙述は、やはり草子地とは違う。それは、この叙述が、「初版序文」で柳田国男が「要するにこの書は現在の事実なり。単にこれのみをもつてするも立派なる存在理由ありと信ず」と述べるような、現在の事実であるとする（ある意味で装う）そのことを保証する叙述になっているからだ。つまり、話の世界の中に読み手を引き込みながらも、あくまでも「事実」という体裁をとる叙述であるということだ。三浦佑之は、遠野物語の話が、あり得ないような出来事の話であっても、その話が事実であるかのように思わせる工夫、例えば目撃者がいるといったことに等によって、事実譚として表現される構造になっていると述べているが（三浦佑之「村落伝承論」）、「近き頃病みて失せたり」も「といへり」もそのように事実譚を構成する工夫の一つであるといえよう。

いや、物語はこれは事実だと言つて嘘を語るものであつてそれとどう違うのだ、という反論があるかもしれない。が、遠野物語を現在の事実譚として見せる大きな力になっているのは、遠野の話や、遠野の人々の現在と自分の現在とをあまり分けずに語る佐々木喜善の現在と、それを聴いて記述する柳田国男の現在とが、重なり合いつつながら曖昧に区別されずにある、ということではないか。

柳田が初版序文の冒頭で「この話はすべて遠野の佐々木鏡石君より

聞きたり」と書いたとき、「近き頃病みて失せたり」も「といへり」も、その主体は、遠野の人々であり佐々木喜善であり柳田国男でもあるということが、宣言された。読み手はこれを無視して遠野物語を読めない。だから、「近き頃病みて失せたり」も「といへり」も佐々木喜善と柳田国男が生きている現在によって語られることになり、その事実性がより強固なものになるのである。言い換えれば、遠野物語の叙述は、佐々木喜善や柳田国男が語る時点での現在を消失させていない、ということである。

一般的には、物語とは、語る時点での現在にとらわれずに自在に語ることである。妖怪が出てくる不思議な出来事も、英雄の荒唐無稽な武勇も、語る時点での現在という視点を超越しているからこそ、読み手はその物語の世界に没入できる。そのような超越的な語りくちを持つことが、やはり物語というものであろう。

とすれば、遠野物語は、遠野の不思議な出来事を語る佐々木喜善（そこには遠野の人々も含まれる）の話を、柳田国男が聞き取り、その聞き取ったことを、現在の事実という意味での現在を起点にしなから語る叙述である、ということになる。

三 「遠野物語」の物語性とは何か

さて、最初に戻るのだが、遠野物語には物語性が感じ取れると述べた。が、遠野物語の叙述について今まで述べてきたところでは、ほとんど物語性を排除する書き方になっていると言える。確かに、柳田国男は「遠野物語をつくる」と言っておきながら、いわゆる一般

的な物語の叙述とは違う書き方を意識していた。それなのに、物語性を強く感じるのである。

柳田は佐々木喜善の語る話に物語性を強く感じた。だが、その物語性は、お化話のような怪異譚にして記述したら表現できない、と考えたのではないか。そう考えたのでなくても、そのようないわゆる一般的な物語的叙述ではない工夫をしたことは確かだ。その一つの工夫が、語り手が神のように自在に語るような、時間を超越した視点で書かないということだった。

このような工夫によって叙述された遠野物語の個々の話を読み込んでいくことで見えてくる「物語性」が、当初、佐々木喜善の話聞いた柳田国男が感じ取った「物語性」であるかどうか、それはわからないにしても、この遠野物語の、事実であることを大事にする叙述から、どのような「物語性」が見えてくるのだろうか。そのことにごだわってみたいと思うのである。そして、その「物語性」とは次のようなものだと考えている。

いわゆる長いストーリー展開の物語が、超越的な視点から出来事を時系列に沿って並べていくことであるとすれば、遠野物語は、むしろ、出来事を同時代(多少の幅はあるが)の時間の中であちこちに散らばって生じたような話として並べる。この場合、物語には超越的な視点があるはずだとするならば、遠野物語の超越的視点とは、それらの断片が境界状態の出来事であるということ以外にはない。それら一つ一つの話は、断片的であったとしても、その断片性は、いずれも境界状態での出来事であることによって、ある共通した心理やふるまいに収斂されていく。例えば、境界状態では誰にとつて

も同じようなことが起こるといったこと。あるいは、境界状態における人々の畏れ、不安といったものである。つまり、時間的な系列によって例えば英雄の物語を語る超越的な視点が、時間を自在に飛び越える神の視点であるとすれば、遠野物語の超越的な視点とは、境界状態における人々の無意識と言えないか。神ではなく、不安や恐れといったものを引き起こす心の奥底にあるものことである。

遠野物語があえて現在の事実にごだわり、事実として語る工夫をしているのは、そういった境界状態における断片化された話にこそ物語性が顕れる、と考えたからではないか。

遠野物語の「物語性」を以上のようなものとして考えてみたいというのが、本稿の目論見である。そのために、遠野物語の断片的な「境界状態に生起する出来事の叙述」から「神隠し」にかかわる話を取り上げてみる。

四 「サムトの婆」の物語性

遠野物語には神隠しの話が多く描かれている。

遠野郷の民家の子女にして、異人にさらはれて行く者年々多くあり。ことに女に多しとなり。(遠野物語三一)

神隠しの出来事は全国に見られるものであり、特に遠野に多かったというのではないだろうが、遠野の不思議な出来事を記す遠野

物語において、神隠し譚はどうしてもはずせないものであつたらう。この世の存在が突然向こう側の世界に隠されてしまう。その展開は劇的であり、まさに物語的に語られ得る可能性を抱えた話である。

遠野物語の神隠しの話の中でも印象深い話の一つに「サムトの婆」がある。

A 黄昏に女や子供の家の外に出てゐる者はよく神隠しにあふことは他の国々と同じ。松崎村の寒戸といふ所の民家にて、若き娘梨の木の下に草履を脱ぎおきたるまま行方を知らずなり、三十年あまり過ぎたりしに、ある日親類知音の人々その家に集まりてありし処へ、きはめて老いさらぼひてその女婦り来たれり。いかにして帰つて来たかと問へば、人々に逢ひたかりしゆを帰りしなり。さらばまた行かんとて、ふたたび跡を留めず行き失せたり。その日は風の烈しく吹く日なりき。されば遠野郷の人は、今でも風の騒がしき日には、けふはサムトの婆が帰つて来さうな日なりといふ。(遠野物語八)

いわゆる神隠しの話といってもよいが、たんなる神隠し譚にはなっていない。梨の木の下に草履を脱いだまま行方不明になったサムトの婆は、三十年あまり経って帰ってくる。ただし、自分の家に戻ってきてそのまま暮らしたわけではない。また何処へか戻っていくのである。そして、どうやらもう姿を現していない。そこで、遠野郷の人たちは、その日が風の烈しく吹く日だったので、風の強い日にはサムトの婆が帰って来さうな日だと語るようになったとい

うのである。

この話のリアリティは、やはり、行方不明の女性が「老いさらばひて帰ってくる」ということにある。とすれば当然何故帰ってきたのか、という問いが成立するだろう。いかにして帰ってきたのかという問いかけにサムトの婆は「逢ひたかりしゆゑ帰りしなり」と答える。実に簡潔でこれ以上説明の必要のない答え方である。

それにしても何故また行ってしまったのであろうか。家人に逢いたく帰って来たのではないか。たぶん、いろんな事情があるのだらうと村の人たちは考えたのに違いない。ひよつとするとこの人はもうかつてのサムトの「娘」ではなくこの世のものではない異人なのではないかと、いろんな想像がはたらく話なのだが、実は、佐々木喜善は同じ話を『東奥異聞』の「不思議な縁女の話」に載せている。

B 岩手県上閉伊郡松崎村字ノボトに茂助と云ふ家がある。昔此の家の娘、秋頃でもあつたのか裏の梨の木の下に行き其処に草履を脱ぎ置きしまゝに行衛不明になつた。然し其の後幾年かの年月を経つてある大嵐の日に其の娘は一人のひどく奇怪な老婆となつて家人に遭ひにやつて来た。其の態姿は全く山姥々のやうで、肌には苔が生い指の爪は二三寸に伸びてをつた。さうして一夜泊まりで行つたが其れからは毎年やつて来た。その度毎に大風雨あり一郷ひどく難渋するので、遂には村方から掛合ひとなり、何とかして其の老婆の来ないやうに封ずるやうにとの厳談であつた。そこで仕方なく茂助の家にては巫女山伏を頼んで、同郡青笹村と自分との村境に一の石塔を建て、こゝより

内には来るなど言ふて封じてしまつた。其の後は其の老婆は来なくなつた。其の石塔も大正初年の大洪水の時に流失して今は無いのである。

同じ話だがいくらか違う。まず、こちらは、寒戸ではなく「登戸」になつてゐる。それから、帰ってくるのは一回限りではなく、毎年やつてくる。その度ごとに大嵐になるので村人が難渋し、村境に石塔を建て老婆を封じたというのである。

この話では帰つた来た老婆は、禍をもたらす神と同じように扱われている。毎年やつてくるというのも、毎年訪れる来訪神的性格をうかがわせる。その姿も「全く山姥々のやうで、肌には苔が生い指の爪は二三寸に伸びてをつた」とあり、人間とは違う存在になつてしまつた様子を伝えている。

実はこの話は実話であると菊池照雄は述べている。この出来事であつた家は松崎村登戸の茂助の家であり、「寒戸」と記述した柳田国男は佐々木喜善の語つた話を聞き違えたかミスプリントではないかという。神隠しにあつたのは茂助の娘でサダという名前である。明治初年の頃のことだという。菊池照雄はこの話について次のように解説している。

B 行方不明になつてから何十年たつたある秋の日のゴオシユ（十月の庭じまいにおこなわれる先祖供養の行事。御日）で、人々が集まつている時、サダが帰つて来た。娘時代のサダの顔を知っている人はもう少なくなつていた。名乗られてあまりの

変わりようにびっくりした。サタのことを知らない子どもたちは、昔話に出てくる山姥そっくりのサタを見て、大騒ぎになったという。

一度山にはいった者は敷居をまたがない。サタは小屋に泊まり、また行く先を告げずに姿を消した。

この後一年に一度ぐらいつつサタは家に帰って来た。ところが、サタが台風の使者でもあるかのように、姿を現わすと大暴風雨になり、そのつど村は大きな被害を受けた。

村方にねじこまれた茂助の家では、山伏、イタコなどの法者に道切りの法をかけてもらう。

この法は、おそいかかってくる怨敵や悪人の道をふさぎ、魔魅まみを降伏させるために、紙の人形を怨霊の依代として筒のなかに封じ、まじないのあと川に流し、サタのくる道に結界をたてた。青笹村との村境にたてたというのはあきらかに六角牛山を意識してのことだった。(菊池照雄「山深き遠野の里の物語せよ」)

「東奥異聞」の話をさらに具体的に解説したものが、遠野物語や「東奥異聞」では書かれていない細かなところが説明されている。菊池照雄は、茂助の家の現代の当主が祖母から聞いた話としてサタのことを書いているので、この細かな説明は当主からの情報なのかもしれない。あるいは、村にはこのように説明し得るほどの具体的な話として伝えられていた、ということか。いずれにしろ、サタはある頃から先祖供養の行事の日に(毎年同じ日に来るとは書いていないが、三浦佑之が「村落伝承論」で述べるようにやはり同じ日それも先祖供養の日に帰ってきたということであろう)山姥のような格好をして毎年のように現れ、家には泊まらず小屋に泊まって帰って行った。が、道切りの法によって封じられそれ以来現れてない、ということのようである。結果というのには石塔のことであろう。

AB、Bといわゆるサムトの婆の話の三つのヴァージョンを取り上げたが、菊池照雄の説明する、Bが最も詳しく、B、Aという順序で、細部が削られやや粗筋的な内容になっている。が、どの話が一番物語としての魅力を持っているかと判断すると、Aが最も物語としての力を持っている、と言えるだろう。その魅力はB、Bという順序で色褪せていく。これは、やはり文体の問題といるのがある。Aは柳田国男の簡潔な文体が物語的魅力の要点を外さずに伝えており、説明のための文章になっていない。逆に、Bはこの出来事そのものを説明するための文体であり、その意味では物語的に語る意図を持っていない。

また、Aの叙述の内容がB、Bと違うところがある。Aを読むものは、三十年たつて帰って来たサムトの婆に感情移入できる。ところが、B、Bはそれが出来ない。そこが決定的に違うのである。

それは「遠野物語」のAにおいて、何故帰って来たのかと問われたサムトの婆が「逢ひたかりしゆゑ帰りしなり」と答えたことに象徴的に現れている。この場面がB、Bにはない。つまり、読み手は「逢ひたかりしゆゑ帰りしなり」という老婆のことばがあることで、その老婆の抱えた悲しみを共感的に体験するのであり、老婆に感情移入できるのである。Aでは老婆の側に立つてこの話を受容できる、と

言ってもよい。だがB、Bの場合はこの言葉がなく、むしろ嵐とともに現れる老婆に困惑する村人の対応が語られる。Bでは山姥のような老婆が現れたとき子どもたちが大騒ぎしたとあるのが印象的である。B、Bの場合、読み手はむしろ村人の方に寄り添っている。老婆の出現に戸惑い畏れる村人の側に感情移入していると言ってもよい。

その意味で、Aに物語性を感じるのには、やはり、読み手が共同体から排除される老婆の心情に移入しやすく、その悲しみに共感できるからであろう。老婆を畏れ排除する村人の心情は災いをもたらす神を畏れる共同体の幻想に基づくものであり、村人の個別的な心情とは違ったものである。この場合、心動かされる物語的展開は、共同の幻想としての村人の恐怖を描くBよりは、老婆の心情に仮託できるAの方であろう。

Bは基本的にBの解釈的な叙述であるから、実質はA、Bの違いということになる。つまり、同じ佐々木喜善の話でありながら、柳田国男が記述したAと佐々木喜善が書いたBとでは、読み手の読み方に違いが生じている。この違いは何を意味するのだろうか。ある意味では叙述の仕方の問題なのではあるが、実は、この違いは、境界状態の物語としての神隠し譚が必然的に抱え込むものではないだろうか。

Aでは「逢ひたかりしゆゑ帰しなり」と神隠しにあつた娘(老婆)の心情が叙述される。それを村人は、神隠しにあつて共同体から消えた娘はきつとどこかで生きているに違いないという切実な思いが晴れたというのではなく、むしろ、こちら側の世界から向こう側へと消えていく老婆の、まだこちらの世界をあきらめられぬ執着の

思いとして聞きたらう。むしろ、そこには、すでに向こう側の住人になつてしまつたような老婆への畏れの感情も交じつていたらうが、Aでは、こちら側の存在が、異界である向こう側の存在にならうとしているときの、こちら側への断ち切れぬ思いが叙述されている、ということである。

それに対して、Bでは、すでに向こう側の存在になつてしまつた老婆がこの世に出現したことを畏れる村人の視点がかなり入っている。この視点では老婆はすでに異人であり、畏れと排除の対象である。

「神隠しは人々の意識の中では霊界への旅立ちであつた」と遠野物語注釈が述べるように(後藤総一郎監修・遠野常民大学編著「注釈遠野物語」)、帰つて来た老婆の、自らが他者になるということの意味する、霊界へ旅立つときの断ち切れぬ思いが発露されるという様相と、すでに向こう側の存在になつてしまつた他者への畏れと排除の様相とが、それぞれ入り交じりながらも、AとBとではどちらかを強調するように描写されたのだということである。

この問題を考えるためにもう少し神隠し譚の話をあけてみよう。

C 遠野町の某という若い女が、夫と夫婦喧嘩をして、夕方門辺に出てあちこちを眺めていたが、そのままなくなつた。神隠しに遭つたのだといわれていたが、その後ある男が千磐が岳へ草刈りに行くと、大岩の間からほろほろになった著物に木の葉を綴り合わせたものを著た、山姥のような婆様が出て来たのに行き逢つた。お前はどこの者だというので、町の者だと答える

と、それでは何町の某はまだ達者でいるか、俺はその女房であったが、山男にさらわれて来てここにこうして棲んでいる。お前が家に帰ったら、これこれの処にこんな婆様がいたつけど、この話を言伝ことづてしてける。俺も遠目でもよいから、夫や子供に一度逢つて死にたいと言つたそうである。この話を聞いて、その息子に当たる人が多勢の人たちを頼んで千磐が岳に山母を尋ねて行つたが、どういふものかいつこうに姿を見せなかつたということである。

(遠野物語拾遺一〇九)

D 青笹村大字中沢の新蔵という家の先祖に、美しい独りの娘があつた、ふと神隠しにあつて三年ばかり行方が知れなかつた。家出の日を命日にして仏供養などを営んでいると、ある日ひよつくり家に帰つてきた。人々寄り集まつて今までどこにいたかと聞くと、私は六角牛山の主のところに嫁に行つていた。あまり家が恋しいので、夫にそう言つて帰つて来たが、またやがて戻つて行かねばならぬ。私は夫から何事でも思うままになる宝物をもらつているから、今にこの家を富貴にしてやろうと言つた。そうしてその家はそれから非常に裕福になつたという。その女がどういふふうにして再び山に帰つて往つたかは、この話をした人もよくは聴いていなかったようである。

(遠野物語拾遺一三三)

CDの話は、ABよりは異界での様子が語られており、神隠しに

あつたサムトの婆が、向こう側の世界でどんな暮らしをしていたかがうがかえるような展開になつている。このCDに共通するのは、やはり、家が恋しいと女が語るところである。特にCは、自分の住んでいた町の様子を聞き夫や子供に一度逢つてから死にたいと語り、自分のことを伝えてくれと言伝を頼んでいる。女の悲痛な心がよく伝わってくる話になつている。この話は、村人の女に対する恐怖は語られていない。その意味では、Aの話に近い。

DはABと同じように神隠しに遭つた女が、自分の仏供養をしている家に戻つてくるという話である。ただ、女は「六角牛山の主のところへ嫁に行つていた」と向こう側の世界での自分の境遇を語る。だから戻らねばならないのである。ABの話において何故老婆は戻るかという疑問がある意味で解き明かす話になつている。

だが、DがABと大きく違うのは、女への村人の恐怖が語られていないことである。女は村人によつて封じられることはない。逆に、家を富貴にして戻つて行くのである。このことは、女がすでに禍福をもたらす神の側に位置することを物語つていよう。「六角牛山の主」とは山の神であろうが、その嫁になつたということは神の側に属したということだ。そのように考えれば、富貴をもたらすということ、大嵐をもたらすということとは、禍福をもたらすいわゆる自然神的性格の神の両面であつて、実は、そんなに違いはないということになる。女がすでにこの世の者ではないという了解において共通している、ということでもある。

五 「神隠し譚」の系列

神隠しにあった村の女が向こう側の存在(神もしくは異人)の嫁になつてゐるという展開は、D以外にも、遠野物語の六と七、拾遺の一〇がそうである。いずれも村の者が山に入りかつて神隠しに遭つた女に出会うというものであり、女は自分が異人の嫁になつたと語る。六の話は次のようになつてゐる。

E 遠野郷にては豪農のことを今でも長者といふ。青笹村大字糠前の長者の娘、ふと物に取り隠されて年久しくなりしに、同じ村の何某といふ獵師、ある日山に入りて独りの女に遭ふ。恐ろしくなりてこれを撃たんとせしに、何をぢではないか、ぶつなといふ。驚きてよく見ればかの長者がまな娘なり。何ゆゑにこんな処にはゐるぞと問へば、ある物に取られて今はその妻となれり。子もあまた生みたれど、すべて夫が食ひ尽くして独りかくのごとくあり。おのれはこの地に一生涯を送ることなるべし。人にも言ふな。御身も危ふければ疾く帰れといふままに、その在所をも問ひ明らかめずして逃げ帰れりといふ。(遠野物語六)

この話では、異人にさらわれた長者の娘が異人の嫁になり、子どもを生むがその子を夫に食われてしまふという悲惨な境遇が描かれてゐる。夫に子を食われるというのは七の話も同じである。これは、神隠しに遭つた女は悲惨な目に遭ふという共同幻想の力が働いてゐると見なせる。三浦佑之は、吉本隆明による神隠し譚は「村落共同体

から出離することへの禁制(タブー)」によつて語られてゐるという指摘を受けて、女は共同体を守るべき存在であるという男たちの観念があることで、共同体を離れた女は山男の嫁になるといつた女たちの恐ろしき体験談が男たちによつて語られるのだと述べてゐる(「村落伝承論」)。

女が共同体を離れることへの様式化された恐怖体験がこのような伝承となつたということである。

が、ここでこだわりたいことは、この神の嫁になる、という語られ方と、Aのような語られ方との違いについてである。AもEも、共同体を出離した女の恐怖の体験が描かれてゐる、とみなせる。が、同じではない。例えば、Eで女は「おのれはこの地に一生涯を送ることなるべし。人にも言ふな」と山で出会つた村の獵師に語る。このことばは、自分の家に帰ることを断念した決意ともとれる。その意味では哀れを誘ふことばだが、一方では、すでに村に帰れないほど異郷の側の存在になつてしまつた、ということも語つてゐるとも言える。

つまり、AあるいはCでは、女は故郷への断ちがたい思いを吐露するが、それは、異郷にてこの世の者ではなくなりつつある女の悲痛な心情がテーマであつたからだ。が、何ものかにさらわれ、妻となつたが子どもを夫に食われてしまふ、と語るEの段階にまで来ると、異郷の側になつてしまつた女の心情よりも、女の置かれた異郷の様子とその異郷への恐怖にと、話の焦点が移動してゐる。これは、神隠しに遭つた女がもうこちら側に戻ることはない、異郷の存在なのだといふところまで、神隠し譚が進んでしまつてゐるからだと言

えるだろう。とすれば、次のような話に神隠し譚はもう一步のところにまで来ているということになる。

F 山口村の吉兵衛といふ家の主人、根子立といふ山に入り、笹を刈りて束となし担ぎて立ち上がらんとする時、笹原の上を風の吹き渡るに心付きて見れば、奥の方なる林の中より若き女の幼児を負ひたるが笹原の上を歩みてこちらへ来るなり。きはめてあでやかなる女にて、これも長き黒髪を垂れたり。児を結びつけたる紐は藤の蔓にて、著たる衣類は世の常の縞物なれど、裾のあたりはぼろぼろに破れたるを、いろいろの木の葉をなどを添へて綴りたり。足は地につくとも覺えず、事もなげにこちらに近より、男のすぐ前を通りて何方へか行き過ぎたり。この人はその折りの恐ろしさより煩い始めて、久しく病みてありしが、近き頃亡せたり。(遠野物語四)

異郷の存在としての女との遭遇譚だが、ほとんど山姥のような印象において語られているとみていい。山姥には老婆と子どもを育てる母のイメージとの両方があるが、ここは母の方の山姥である。が、その山姥のイメージを脇に置いて読むならば、この女は、神隠しにあつて異人の嫁になり子どもを育てている女、と言えるだろう。そう読むことにためらいがあるとするれば、この女は出会った村の男のすぐ前を、ことばもかけずに通り過ぎてしまうからだ、異郷に住んでその異郷の住人になってしまったとすれば、もう村の男に声をかけないということもあり得る。あるいは、すでに村に住んでいた

ということも忘れてしまったのかもしれない。いずれにしろ、Fは今まで取り上げたきた神隠し系列の話の中に置くならば、神隠しにあつて異郷的存在になった女の話なのであると見る事ができよう。が、これは山姥との遭遇譚なのだと見てしまえば、神隠し譚の系列からは外れた話だとも言える。

次にあげる拾遺一一一の話は、Fの話と似ているが、こちらは明らかに神隠し譚の系列に入る。

G 栗橋村のアスカバの某という狩人、先年白見山で雨に降り込められて、霧のために山を出る事ができなかった。木の根にもたれて一夜を明かしたが、夜が明けて雨が晴れたので、そこを歩き出すと、ひどく深い谷へ落ちた。その時に向こうから髪をおどろに振り乱した女がやって来るのに逢った。著物は全くちぎれ裂け、素足であつたが、たしかに人間であつた。鉄砲をさし向けると、ただ笑うばかりである。幾度も打とうと打とうと覗いながら打ちかねているうちに、女は飛ぶようにして駆け出して、谷の奥へはいつて見えなくなつた。後に聞いた話では、これは小国村の狂女で、四、五年前家出をして行方不明になつたおんなだつたらうとのことである。それでは白見にいたのかと人々は話し合っていたが、はたしてその女が狂女であつたかどうかはわからない。(遠野物語拾遺一一一)

小国村の狂女が家出して行方不明になつた。神隠しとは語られていないが、山に入って異郷の者になつたのではないか、と村の者た

ちが噂をしていたことはいかかえ。その意味では、神隠しにあった女として扱われていたことだろう。だから、狩人は、後からその女は小国村の狂女だと聞かされたのである。この話では、女は子どもを負ぶってはいない。が、その姿から十分に山姥の幻想をまもって語られている。一方で、小国村の誰であるとその素性についても推測されている。ただし、女は狩人にことばをかけずに山姥のように山奥に行ってしまう。明らかに異郷の存在なのだ。

つまり、この狩人が遭遇した女は、村の女でありながら、そのことを忘れている存在として登場していると見ていい。これは、もともと女が狂女だからである。この話の読み手が、村の女から異郷の存在になっていく女の心の悲痛を体験できないのも最初からこの女が狂女だという設定の故である。

FとGの話を重ねて考えてみよう。山に入った村の男は異郷の存在であるかのような女に出会う。Fでは、女は異郷の恐ろしい山姥のように見えた。だからそれなりの禍を被ることになった。一方Gでは、狩人は判断を猶予した。後で行方不明になったとことこの誰だという解釈が施され、男は禍を被ることから免れた。

FとGも山の中で異郷の女と出会った話であるが、いずれも神隠しの系列の中に置いて考えれば、Fは、すでに山姥幻想の側に女が変化しつつあり、神隠し幻想を脱しつつある話と見なすことができる。Gは、行方不明になった哀れな狂女の話であり、正確には神隠しにあった女という幻想をそれほどまもっていない。従って、神隠し幻想に取り込まれる寸前の話になっているという見方もできる。

例えば次の話などはどうだろうか。

H 白望の山続きに離森といふ所あり。その小字に長者屋敷といふは、全くの無人の境なり。ここに行きて炭を焼く者ありき。ある夜その小屋の垂れ菰をかかけて、内を窺ふ者を見たり。髪を長く二つに分けて垂れたる女なり。このあたりにても深夜の女の叫び声を聞くことは珍しからず。(遠野物語三四)

I 佐々木氏の祖父の弟、白望に茸を採りに行きて宿りし夜、谷を隔てたるあなたの大なる森林の前を横ざりて、女の走り行くを見たり。中空を走るやうに思はれたり。待ちてやアと二声ばかり呼ばはりたるを聞けりとぞ。(遠野物語三五)

この白望山は、G(拾遺一一一)の話にある白見山のことである。Gで出会った白見山の女は、行方不明になった狂女と解釈された。この同じ白見山に出没するHとIの女もまた狂女なのかもしれない。ここでは女の素性の解釈は施されていないが、ほんの少し説明を加えればいくらかでも神隠し譚になり得る話である。その意味では、神隠しの系列に連なる話であるとみなすことができる。

以上のように、明らかに神隠し譚ではないように思われる話でも、実は、神隠し譚の系列のなかでとらえられることがわかるだろう。言い換えれば、最初にあげたサムトの婆のような神隠しの話は、遠野物語ではかなりの広がりを持つ話なのである。

例えば次のような話であっても取りようによつては、神隠し譚である。

J 山々の奥には山人住めり、栃内村和野の佐々木嘉兵衛といふ人は今も七十余にて生存せり。この翁若かりし頃獵をして山奥に入りしに、はるかなる岩の上に美しき女一人ありて、長き黒髪を梳りてゐたり。顔の色はきはめて白し。不適の男なれば直に銃を差し向けて打ち放せしに弾を応じて倒れたり。そこに駆け付けて見れば、身のたけ高き女にて、解きたる黒髪はまたそのたけよりも長かりき。後の駿にせばやと思ひてその髪をいささか切り取り、これを縮縮ねて懐に入れ、やがて家路に向かひしに、道の程にて耐へがたく睡眠を催しければ、しばらく物陰に立ち寄りてまどろみたり。その間夢と現との境のやうなる時に、これも丈の高き男一人近よりて懷中に手を差し入れ、かの縮縮ねたる黒髪を取り返し立ち去ると見ればたちまち睡りは覚めたり。山男なるべしといへり。(遠野物語三)

山男の妻と思われる女は、神隠しにあつた女かどうかはわからな
い。むしろここでは、山女というべきかもしれない。しかし、今ま
で見てきた神隠し譚の展開の仕方からすれば、ここで描かれる女は
十分に神隠しにあつた女であると言えるのである。神隠しにあつた
女は、異郷の存在になつてしまふことで、かつて村で暮らしていた
自分の痕跡を消し去つてしまふからである。少なくとも村人たちはそ
のように考へていた。次の話はそのことをよく物語っている。

K 遠野の裏町にこうあん様という医者があつて、美しい一人娘
を持つていた。その娘はある日の夕方、家の軒に出て表通りを

眺めていたが、そのまま神隠しになつてついに行方が知れな
かつた。それから数年の後のことである。この家の勝手の流し
前から、一匹の鮭が跳ね込んだことがあつた。家ではこの魚を
神隠しの娘の化身であらうといつて、それ以来いっさい鮭はく
はぬことにしている。今から七十年前の出来事である。(遠野物
語拾遺一四〇)

神隠しにあつた娘の親は鮭になつたのだと考え鮭を食わぬこ
とにした。これをAのサムトの婆の話と比べてみるとその違いが良
くわかるだろう。両方とも、神隠しにあつた娘が帰ってくる、とい
う点では同じである。が、Aでは娘はまだ異郷の側の存在になりきつ
ていない。一方Kでは鮭という異類になつてしまつてゐる。サムト
の婆は三十年経つて帰つたきたが、このKではわずか数年で、家の
者は娘が鮭になつたと判断してしまふ。

おそらく、身内を神隠しにあつた者は、何年か経てばもう帰つて
こないとあきらめ、異郷の存在になつてしまつたと思つたのである。
だが、一方では、帰ってくるかもしれないという気持ちもなくした
訳ではない。そういった揺れ動く心性が、このような両極端の神隠
し譚を成立させているのだと言える。

六 「神隠し譚」の物語性

以上、遠野物語と遠野物語拾遺における様々な神隠しの話を眺め
てきた。これらはいずれも境界状態において生起した出来事の叙述

である。事実の話であるという叙述のされ方をしてはいるが、いずれも一定の様式によって話が展開している。その様式性をもって展開しているという意味でこれらの話をここでは「神隠し譚」と呼んでいるのだが、その様式とは、次の二つの展開になるだろうか。

a・女がある日失踪する。

・何年か経って女は突然山姥のような姿で山から帰ってくるがまた山へ戻ってしまう。

b・山に入った村の男が山の中であつて失踪した女に出会う。

・女は異郷の者にさらわれ今はその妻になつてしていると語る。

この二つの様式に沿って遠野物語・遠野物語拾遺の神隠し譚は展開しているが、実は、個々の話は様式に沿いながらもそれぞれ細部において違いがある。その違いは、ある意味で微妙である。例えば、サムトの婆のAと登戸の老婆のBの話のように、同じ語り手なのに違つてしまう場合がある。Cのようにa bのパターンをまたいでいるような話もある。Gのようにただ山で神隠しにあつて失踪したらしい女に出会つた、という話もある。あるいは、Kのように鮭になつたのではないか、とする話もある。

様式性に沿って展開していると述べたが、それは、神隠し譚系列の、似ているようで細部が違う話を集めて、分類すれば二系統の話にまとめられるということである。様式性に沿って話が作られたのだ、ということを言いたいわけではない。

ここで注目したいことは、様式性の抽出ではなく、ある似た

話のグループが、それぞれ細部の違いを持って展開していることなのである。境界状態において体験したことを表現する言説は似たようなものになる、ということがまずあげられる。と同時に、それらは、細部において様々なバリエーションを持つ。それは、境界状態における当事者の心理が普通ではないからだ、ということだと思われる。普通ではないのは当然だろうが、もう少し具体的に言えば、この世から離脱することから向こう側の存在になつてしまふまでの、揺れ動く心理やふるまいというのがそこにあり、その心理やふるまいが反映されてしまふ、ということである。

様々な神隠し譚で興味深いのは、神隠しにあつた女の心意がわかるように描かれるところである。語り手の視線はあくまでも村人の側であるが、村人の畏れと同時に、サムトの婆や異人の妻になつてしまった女の家人に会いたいという痛切な心情を描くのである。そして、一方では、かつて失踪したものかもしれない女がただ目の前を通り過ぎる恐怖を描く。その恐怖には、こちら側の世界を失つてしまうことの恐怖もまた含まれるだろう。この世を離脱するときの痛切な感情、そして離れてしまったものへの恐怖。それは、古事記神話における、黄泉国訪問神話でのイザナキとイザナミの両者の葛藤を思い起こさせる。イザナキはまずイザナミにこの世に戻ることを願ひ、イザナミもそれを願うが果たせない。あの世の死者となつたイザナミにイザナキは驚き逃げ出す。イザナミはかつて夫であつた男を追いかける。この黄泉国訪問神話における、イザナキとイザナミのストーリーの個々の場面が個々の神隠し譚によって切り取られている、と解釈してもよい。

この世から向こう側に行くまでにはタイムラグがある。そのタイムラグの間に生起する出来事に神隠し譚は集中している。ここでそれを境界状態と呼んでいるが、その境界状態における、揺れ動く心理やふるまいのリアリティこそが、ここでわたしたちが感じ取る「物語性」なのである。そういった物語性は、時間を超越した自在な語り手によって描かれる物語ではなかなか描けない。むしろ、事実のような話として断片化された話の中にリアルに顕れる。

恐らく柳田国男は、佐々木喜善の断片化された話を聞きながら、ここには「物語」があると感じ取った。その「物語」はここで述べる「物語性」とそれほど違わないものだったはずである。

最後に、神隠し譚ではないが、そういった「物語性」が最もよく顕れている遠野物語の話を紹介しておく。

佐々木氏の曾祖母年よりて死去せし時、棺に取り納め親族の者集まり来てその夜は一同座敷にて寝たり。死者の娘にて乱心のため離縁せられたる夫人もまたその中にありき。喪の間は火の気絶やすことを忌むが所の風なれば、祖母と母との二人のみは、大なる囲炉裏の両側に坐り、母人は傍に炭籠を置き、をりをりに炭を継ぎてありしに、ふと裏口の方より足音して来る者あるを見れば、亡くなりし老女なり。平生腰かがみて衣物の裾の引きずるを、三角に取り上げて前に縫ひつけてありしが、まざまざとその通にて、縞目にも目覚えあり。あなやと思ふ間もなく、二人の女の坐れる炉の脇を通り行くとして、裾にて炭取りにさはりしに、丸き炭取りなればくるるとまはりたり。母人

は気丈の人なれば振り返りあとを見送りたいれば、親縁の人々の打ち臥したる座敷の方へ近より行くと思ふほどに、かの狂女のけたたましき声にて、おばあさんが来たりと叫びたり。その余の人々はこの声に睡を覚しただ打ち驚くばかりなりしといへり。
(遠野物語二二)

参照した文献

石井正巳『遠野物語の誕生』若草書房 二〇〇〇年

藤井貞和『物語理論譚義』東京大学出版会 二〇〇四年

三浦佑之『村落伝承論』五柳書院 一九八七年

後藤総一郎監修・遠野常民大学編著『注釈遠野物語』筑摩書房 一九九七年

菊池照雄『山深き遠野の里の物語せよ』泉社 一九八九年

『佐々木喜善全集』遠野市立博物館編 一九八六年

吉本隆明『共同幻想論』角川文庫 一九八二年(書かれたのは一九六八年)